

奨励賞

助け合える社会に

私は中学二年生になって、ある経験を通して体に障がいを持った人達について深く考えるようになりました。

私は部活の練習試合中に前十字靭帯損傷という大きな怪我をしました。怪我をしてからの生活では、精神的にも肉体的にも大変な生活が待っていました。自分のできることは自分でやるよう心がけていましたが、誰かの手助けが必要な時もたくさんありました。家では家族が、学校では先生や友達、部活では顧問の先生や同じ部活の仲間などたくさんの人々に支えてもらいました。

生活面において全てが順調にはいかず、時には、今まで出来ていた事が思うように行かず辛くなったり、気持ちが落ち込んでしまう事もたくさんありました。特に辛いと感じた時は、一ヶ月の病院生活の中で手術直後の数日間でした。私は術後数日間は、ベッドから移動する時、一人では出来ない事ばかりでした。そのせいで自分自身が情けなくなったり、落ち込む時もたくさんありました。「何かあつたらすぐに呼んで下さいね」と言ってくれる看護師さん。看護師さんは患者さんをサポートするのが仕事で、たくさん頼って良いのだと私も理解はしていました。けれども私は、看護師さんも「こんな事頼んだら嫌かな」「何度もお願ひしたら怒られるかな」など、色々と考えてしまい、看護師さんの顔色をうかがってしまう時や我慢してしまう時がたびたびありました。看護師さんにサポートしてもらう時は、毎回心の中で（ごめんなさい…。すみません…。）と思い、申し訳ない気持ちでいっぱいだったのを覚えています。私は少しずつ自分で出来ることが増えてきていますが、病気や障がいによって、術後の私のような生活がずっと続していく人も社会にはいると思います。そんな人達の気持ちを考えた時、私が病院生活で感じたように申し訳ない気持ちでいるとしたら、とても可哀想だなと思いました。また、毎日の生活も苦しいのではないかなと思いました。体の不自由な人は何も罪がないにも関わらず、申し訳ない気持ちを持ちながら生活していかなくてはいけないのでしょうか。それは違うと思います。私は世の中の人々全てが平等に幸せになれる世界が良いなと思います。たとえ、体が不自由でもそうでなくても同じ人間。助けられたり、助けたり、それが当たり前に出来たら良いと考えます。

助け合うことが当たり前の社会にするために私が考えたことは、まず、相手の気持ちになって色々な物事を考えるということです。体の不自由な人はどうしても出来ることが限られてきてしまいます。その為、誰かに助けてもらうことが多くあります。助けてもらうことはもちろん嬉しい事ですが、助けてもらうことばかりが続くと自分に自信が持てず、人との関係も一歩引いてしまうこともあります。

ると思います。助けてあげる側になつたら、助けてもらう側の人のそんな気持ちを考えて、声をかけていけたら良いのではないかでしょうか。ただでさえ、人間関係はとても難しいものです。けれど、相手の気持ちになつて考えると優しい言葉が出てくる、優しい言葉が出てくることによって、良い関係が生まれてくるのではないかと私は考えます。次に私が考えることは、見た目は関係ないということです。私達人間はどうしても見た目で判断してしまう人が多いと感じます。けれど、病気や障がいによって体が不自由になった人は、松葉杖で歩いていたり、車いすを使っていたりが違っていても何も皆と変わることはありません。体に障がいを持った人もみんなと同じように一生懸命生活しています。私は車いすの時も松葉杖の時も今と変わらず、友達と冗談を言って笑い合えることが楽しいし、体育の授業でみんなが楽しく授業をしている中一人でいるのは悲しいし、今日あった嬉しい出来事を話しながら食べるご飯は美味しいし、怪我をしても感じることは同じでした。美味しい、楽しい、悲しいなど感じる瞬間は人それぞれですが誰でも、どんな障がいがあったとしても同じなのだと思います。そのことを、怪我をして学びました。

実際に怪我をして良いことよりも辛いことの方が多かったかもしれません、この経験をしたからこそ、初めて感じたことや思うことが増え、以前の自分よりも成長できた気がします。また、私のような体の不自由な人達がどうしたら幸せに暮らせるようになるかを考え、相手の立場に立って考える事や見た目の違いだけで自分とは違うと判断しない、同じ気持ちを持っているということを実感することが出来ました。今では、怪我の経験がとても私の人生に大切なことを教えてくれたと思います。この経験を活かし、もっと勉強をして、どんな障がいなどの不自由さがあっても、そうでなくとも、みんなが同じように笑い合える社会を作つていける大人になりたいです。